

二次叙述を構成する en N および en Adj.*

武本 雅嗣

1. はじめに

フランス語の前置詞 en が二次叙述の構成要素になっているとみなされる事例については、Fuchs(1999) や Vigier(2008) などの先行研究がある。

- (1) Jean travaille en maçon. (Fuchs 1999)
ジャンはレンガ職人のように働いている / ジャンはレンガ職人らしく働いている
- (2) En 1991, lors de cette délicate affaire, Mitterrand a agi en président.
1991年、その難しい問題の際、ミッテランは大統領然として行動した (Vigier 2008)

武本(2016) では、この種の en N が「変化の結果」を表すのは en の「到着先」と「範囲」を表示する基本的な機能に起因していること、そして、下の (3) のような明確に変化を表す動詞で構成される結果構文の en N とは異なり、(4) のような描写的 (depictive) な二次叙述の en N の N は、たとえ形容詞が付加されても冠詞は伴わないことから、決して個体を指さず、その指示性は常に低いままであることを指摘した。

- (3) La grenouille se transforma { en beau prince / en un beau prince }.
カエルは美しい王子に変身した
- (4) Il s'efforce d'agir { en soldat vaillant / *en un soldat vaillant }.
彼は勇敢な兵士らしく行動しようと努めている (以上 武本 2016)

前置詞 en を介する二次叙述の変化の含意については Vigier(2008) も言及しており、確かに上の例文 (1) (2) (4) に関しては、主語の指示対象の実際の変化を表していると言えよう。しかしながら、次のように、その対象自体が変化しているとはみなさ

* 本稿は、2017年4月15日に関西フランス語研究会において行った口頭発表に基づいて執筆したものである。その研究会では多くの方々から様々な貴重なご指摘・ご教示をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

れない事例がある。

- (5) **Manet a peint Victorine en chanteuse.**
マネはヴィクトリーヌを歌手として描いた
- cf. **Jean a peint les murs en blanc.**
ジャンは壁を白く塗った
- (6) **L'orange se consomme en fruit mais peut aussi servir à la préparation de jus, de confitures, de bonbons, de gâteaux...** (web)
オレンジはフルーツとして食べられているが、ジュースやジャムやキャンディーやケーキの加工にも使われている
- cf. **L'orange sanguine se consomme surtout en jus.**
ブラッドオレンジはとくにジュースとして消費されている
- (7) **Le lynx, c'est un chat en plus gros.**
リンクスは大型の猫である
- cf. **Le muscle a besoin de repos pour se reconstruire en plus gros.** (web)
筋肉はより大きく再生するために休息を必要とする

あまり取り上げられていないが、このような事例の **en** はヴァージョン (version) を示していると考えられる。

本稿では、以上のような二次叙述をなす **en N** および **en Adj.** の様々な事例を観察し、それらが含意する変化性について考察を行う。そしてとくに、ヴァージョンを示す **en Adj.** について認知意味論的観点から分析し、それが参照点構造に基づいた主観的な変化の認識を反映する形式であることを示す。

2. 二次叙述の **en N** の変化性

先行研究において二次叙述的用法として取り上げられているのは、主語の指示対象が人間の場合がほとんどであるが、用例としては人間以外の場合ももちろんある。ただ、人間と物では変化性に関して違いがあるので、分けて考察することにする。

2.1 [+human] の場合

二次叙述的用法の **en N** は **N** が人間名詞である場合が多い。それは、無生物とは違い、人間が自律的に様々な存在だからである。まず、変化が明白な例を挙げよう。

11 以下の例文のうち、インターネットからの採取例については (web) と記した。それらがフランス語として適切な文であることはインフォーマントに確認してある。

(8) À ce moment-là, cet enfant s'est comporté en adulte.

その時この子は大人らしく振舞った

(9) Il se sent femme et vit en femme.

彼は自分を女性と感じ、女性として暮らしている

人間は容姿や振る舞いや生き方を変えられるし、性別さえ変更できる。二次叙述的用法の en N について意味論的に興味深いのは、N が人間名詞の場合の多義性である。

(9) の場合、en femme は女性ないし女性らしい人または女性の装いへの変化の意味を含んでいる。主述関係は、コピュラ文では繫合動詞を介して表されるのに対して、二次叙述の場合は繫合動詞なしで表されるわけであるが、コピュラ文の en N と二次叙述文の en N では制約に違いがある。

(10) a. Il est {en roi / *en ami}. (être が存在の意味でない場合²⁾)

彼は { 王様の服装をして (王様の象徴的な格好をして) / *友人の服装をして (友人の象徴的な格好をして) } いる

b. Il est arrivé {en roi / en ami}.

彼は { 王様に扮して・王様らしく・王様として / 友人をよそおって (友人になりすまして)・友人として } やって来た。

en N の裸名詞 N は非指示的であるが、コピュラ文の en N は主語の人間が非指示的な N の装いを纏っていることを表す。不特定・非個別的な王様の象徴的な格好は確立しており、容易に想定されるので問題ないが、不特定・非個別的な友人の服装はイメージできないため意味をなさない。それに対して、二次叙述の en N は非指示的な N への変化の結果を示すため、物理的な装いだけでなく抽象的なよそおいまで表しうる。二次叙述の en N は、外面的な変装・仮装だけでなく内面的な変容・変質まで表しうるので、コピュラ文の en N にあるような制約はないのである。その多義性は、en の変化の結果を示す機能と N の非指示性に帰することができる³⁾。

ただ、様々な実例を観察すると、二次叙述的用法の en N は、主語の指示対象の属性や役割の変化を表しているというよりも、内在するあるいは潜在的に持っている N の属性や役割の顕在化を表していると考えられる事例も多い。実際、この構文の主語の人間は、N の職に就いていない場合だけでなく (2) のように就いている場合もある。そもそも人間には各々複数の属性があるし、誰しもいろいろな顔を持っており、時と場合に応じて様々な役割を務めて行動するものである。

²⁾ Il est ici en ami. (彼は友人をよそおって・友人としてここに来ている) は可能である。

³⁾ (3) の結果構文で形容詞が付いているにもかかわらず無冠詞の en beau prince が可能なのも、童話における「美しい王子」の総称的なイメージが確立しているからだと考えられる。

- (11) Je vais te parler **en médecin**, pas **en ami**.

私はこれから君に友人としてではなく医者として話をする

そして、次のように、とくに八面六臂の活躍をするような人については、その多才ぶりが複数の en N によって表されることがよくある。

- (12) Le Vinci regarde **en artiste** le monde qu'il analyse **en savant**. [...] Il observe **en peintre** la terre dans sa parure d'arbres, de verdure et de fleurs [...]

(*Léonard de Vinci: l'artiste et le savant*, 269-270)

ダ・ヴィンチは学者として分析する世界を芸術家として見る (...) 彼は木や緑や花で彩られた大地を画家として観察する

- (13) Zinedine Zidane a gagné la Ligue des Champions **en joueur**, **en adjoint** et désormais **entraîneur**.

ジネディヌ・ジダンは選手として、副監督として、そしてそのあと監督としてチャンピオンズリーグを制覇した

- (14) Karim Benzema a montré qu'il était aussi bon **en passeur** qu'**en buteur**.

カリム・ベンゼマはゴールゲッターとしてだけでなくパスラーとしても優れていることを示した

もっとも、一人で何役もこなすということは^{べんぎ}変化しているということであり、このような複数の en N の使用の場合も変化性の関与は明らかである。

2.2 [-human] の場合

前節では主語の指示対象が人間の事例を取り上げたが、物質も自然現象によって他の物質に転化することがあるので、主語および en N の N に無生物名詞が現れることもある。

- (15) Selon la température, les gouttelettes dans les nuages tombent **en pluie**, **en neige**, **en grêle**. (web)

気温によって、雲中の水滴は雨や雪や雹となって降る

ところが、物理的な変化がないにもかかわらず en N が用いられている事例もみられる。それは、複数の属性を持ち合わせているため、見方によってどちらのカテゴリにも入りうる物の場合である。例として、一般に野菜として食べられているものの、植物学的には葉や茎や根ではなく実^みに分類されるトマト・アボカド・茄子・胡瓜などを挙げるができる。このような元々甘味の少ない野菜的な果実は *légume-fruit*

(Fruit, au sens botanique, issu d'une plante potagère et consommé comme légume) と呼ばれており (英語では fruit vegetable)、それらが「野菜として」食べられていることを表す場合、“consommer comme légume / comme un légume”のほか “consommer en légume” のコロケーションも散見される。

(16) a. La tomate est un fruit consommé comme légume. (web)

トマトは野菜として食されている果実である

b. La tomate est botaniquement un fruit que l'on consomme en légume.

トマトは植物学的には果実だが我々は野菜として食している (web)

(17) a. L'avocat, majoritairement consommé comme légume est en réalité un fruit issu de l'avocatier. (web)

アボカドは、たいてい野菜として食べられているが、じつはアボカドの木になる果実である。

b. L'avocat est en fait un fruit mais il est d'usage - probablement parce qu'il n'est pas du tout sucré - de le consommer en légume. (web)

アボカドは実際は果実だが、おそらくまったく甘くないため、野菜として食べるのが慣習になっている

comme N と en N の異なる形式は、変換可能な場合も多いが、やはり異なる意味を表している。comme légume のほうは単に野菜と同定していることを表しているのに対して、en légume のほうは単なる同定ではなく果実から野菜へという変化の意味を含んでいる。つまり、en が用いられた場合には、カテゴリー間の移行が読み込まれているわけである。このような主観的な変化の認識に着目すれば、野菜的果実について en légume だけでなく en fruit が用いられることがあることも説明できる。アボカドに関する次の記述は (17b) と対照的である。

(18) L'avocat, fruit ou légume, tout dépend du pays où on le déguste. [...] Les Créoles le mangent en fruit avec du rhum, du citron [...] (web)

アボカドは、それが果実か野菜かは食べる国による (...) クレオールの人たちはそれをラム酒やレモンをかけてフルーツとして食べている (...)

アボカドはヨーロッパの社会通念では野菜であるが、同じ食材でもところ変われば食べ方も変わる。(18) でそれが原産地ではフルーツとしても食べられていることを表すために en fruit が用いられているのは、ヨーロッパ人の視点から見て、野菜から果実に変わっていると捉えられているからである。

このように、抽象的であっても変化が認識されれば en が用いられるわけであるが、

逆に、変化が認められなければ **en** は用いられない。

(19) a. Ces feuilles sont consommées { **comme légume / en légume** }.

これらの葉っぱは野菜として食されている

b. L'épinard est consommé { **comme légume / ?en légume** }.

ほうれん草は野菜として食されている

(19a) の **en légume** は、葉っぱが野菜になっているという認識を反映したものである。一方、(19b) で **en légume** の使用が不自然なのは、ほうれん草が野菜に変化しているという捉え方はなされにくいからである。結局、**en** と **comme** のどちらが選択されるかは変化性の有無による。**comme** が用いられた場合とは異なり、**en** が用いられた場合は、抽象的であれ何らかの変化の含意があるのである。変化の認識が移動の認識に基づいていることは言語表現に普遍的にみられるという指摘はとくにメタファー研究においてなされてきたが⁴⁾、フランス語で物理的な移動と抽象的な変化がともに同じ前置詞 **en** によって表されるのも、やはり概念レベルで共通性があるからである⁵⁾。そして、**en** のその機能が二次叙述的用法でも保持されているのである。

3. ヴァージョンを示す場合の変化性

二次叙述の **en N** には、**N** がヴァージョン（〔原型・原物に対する〕異型、異形、異版、改作、翻案、翻訳や〔個人的なまたは特殊な立場からの〕解釈、見解、異説など）を示しているとみなされる事例がある。本章では、**en N** と **en Adj.** がヴァージョンを示す事例について考察する。以下、**en N** と **en Adj.** に分けて分析していく。

3.1 **en N** の事例

人間のように自ら変化しない物でも、手が加えられると様々に変化する。たとえば、物語や小説は外国語に翻訳されることもあれば、映画や演劇やオペラやミュージカルに翻案されることもある。次のように、書籍版と映画版や CD 版などを表すために **en** が用いられることも多い。このような **en N** は別ヴァージョンを示している。

(20) Je le recommande **en livre** plutôt qu'**en film**.

私はそれは映画よりも本のほうを薦める

(21) Je l'a acheté { **en livre / en CD / en DVD** }.

私はその〔書籍版 / CD 版 / DVD 版〕を買った

⁴⁾ cf. Lakoff & Johnson(1980) など。

⁵⁾ 現代フランス語では、**en** は限定詞とりわけ定冠詞（なかでも男性単数形と複数形）と結びつかなくなっており、慣用的用法を除いて、基本的に抽象的または比喩的な範囲や到着先を示すようになっている。

また、食材は、調理されているいろいろな食べ物や飲み物になったり、前菜や主菜やデザートになったりする。その飲食や利用の様々なかたちを表わすために複数の en N が用いられている例がよくみられる。

- (22) **Le cassis se consomme en sorbet, en confiture, en gelée, en gâteaux, etc.**
カシスはシャーベット、ジャム、ゼリー、ケーキなどで食べられている (web)
- (23) **Le riz peut également se préparer en salade, voire en dessert.**
米はまたサラダやさらにはデザートとしても調理できる
- (24) **Les eaux de Vichy sont utilisées en boisson ou en soins externes.** (web)
ヴィシーの水は飲み物としてまたは外用療法として利用されている

このような en に続く複数の名詞は範列をなしているのである。

ここで、冒頭で示した、典型的なフルーツについて en fruit が単独で用いられている例をみてみよう。

- (25) **L'orange se consomme en fruit mais peut aussi servir à la préparation de jus, de confitures, de bonbons, de gâteaux...** (web) (=6)
オレンジはフルーツとして食べられているが、ジュースやジャムやキャンディーやケーキの加工にも使われている

先ほど、(18) で野菜の果実であるアボカドが「フルーツとして」食べられていることを表すために en fruit が用いられているのは、野菜からフルーツに変化していると捉えられているからだとしたが、(25) のオレンジは野菜の果実ではないのでこの en fruit の使用の理由を同じように説明することはできない。典型的なフルーツであるオレンジについて en fruit が用いられているのは、消費のありうるかたちの一つを示すためだと考えられる。なぜなら、この文は次のようにパラフレイズできるからである。

- (26) **L'orange se consomme en fruit mais aussi se prépare en jus, en confitures, en bonbons, en gâteaux...**
オレンジはフルーツとして食べられているが、またジュースやジャムやキャンディーやケーキに加工されてもいる

つまり、(25) では、明示されてはいないものの、続く表現によって、範列をなす消費の他のかたちが暗示されているわけである。したがって、その en fruit は、意味的にヴァージョンを示しているとみなされる。同様の例を挙げる。

- (27) **La pêche se consomme en fruit frais mais on en trouve également conservées en boîte dans un sirop.** (web)

梨は生のフルーツとして食べられているが、缶詰のシロップ漬けのものもみられる

(27) の **en fruit frais** も、梨のシロップ漬けヴァージョンに対する生フルーツヴァージョンでの食べ方を表しているのである。

対象自体は変化しない事例はほかにもある。

- (28) **Elle m'a offert cette écharpe { en cadeau / en souvenir / en récompense / en remerciement }.**

彼女は {プレゼントとして / お土産として / 褒美として / お礼として} このスカーフをくれた

贈り物は、何らかのプレゼントや土産や褒美など様々なかたちで渡される。その際、対象は物理的には変化していないが、心的には抽象的なかたちとなり、包摂的に捉えられているのである。また、次の人間の事例でも、当人自身は物理的に変化していない。en で表示されているのは、ありうる姿や解釈のひとつである。

- (29) **Manet a peint Victorine en chanteuse.** (=5)

マネはヴィクトリーヌを歌手として描いた

cf. **Jean a peint les murs en blanc.**

ジャンは壁を白く塗った

- (30) **Elle me traite encore en enfant !**

彼女はいまだに私を子ども扱にする

(29) の場合、比較のために挙げた派生的な結果構文のほうは壁自体が物理的に白色に変化していることを表しているが、問題の文は、ヴィクトリーヌ自身が物理的に変化していることを表しているわけではない。彼女はいわば歌手ヴァージョンで描かれたわけで、絵画の中で歌手に姿を変えただけである。それでも、結果構文とは変化の質が違うものの、ヴァージョンを示す場合も変化性は関与的である。また、次の (31) はフィデル・カストロの死去を伝える記事のタイトルであるが、この場合は主語の人間が複数に変化していることを表しているのではなく、カストロの死に様の複数の解釈を表していると考えられる。

- (31) **Il meurt en héros et en tyran** (web)

彼は英雄としてそして独裁者として死去した

実際、この文は次のようにパラフレイズできる。

- (32) **Il meurt comme un héros par certains et comme un tyran par d'autres**
彼はある人たちからみると英雄、別の人たちからみると独裁者として死去した

しかしながら、ここでもやはり意味的差異がある。(32) は人によって同定が異なっていることを表しているのに対して、(31) は異なる解釈があることを表している。その en N は主語の人間の自律的变化ではなく、視点によって違ってくる複数の解釈を表しているのである。

ヴァージョンを示す en N の用法についてはあまり取り上げられてこなかったが、次節で考察する en Adj. も含め、二次叙述構造をなす場合はやはり何らかの変化性が関与しているのである。

3.2 en Adj. の事例

en に続く名詞が具体的・個別的な存在を指さず、それが非指示的であることは先ほども述べたが、en に続くのが実体を指示しない形容詞のみの事例もある。前置詞 en と形容詞ないしその名詞化したものの結合には、en vain 「無駄に」、en clair 「はっきりと、普通文で」、en particulier 「とくに」、en général 「一般に」、en bref 「手短に」などの慣用句のように副詞的に働くものもあるが、次のように二次叙述の構成要素になっていると解することができるものもある⁶⁾。

- (33) **Le copiste a peint “L’Origine du Monde” de Gustave Courbet en plus grand que l’original.**

その模倣画家はギュスターヴ・クールベの『世界の起源』を原画よりも大きく描いた

- (34) **J’ai essayé aussi la rhubarbe en version salée mais je la préfère en sucré finalement.** (web)

塩味ヴァージョンのリュバープも試したが、結局私はリュバープは甘いのが好きだ

⁶⁾ 英語にも同様に in が用いられる副詞的慣用句があるが、そのほとんどはフランス語からの借用に基づいたものであろう。

- (i) a. Elle a tenté **en vain** d’ouvrir la porte.
b. She tried **in vain** to open the door.
(ii) a. Le mot de passe est envoyé **en clair**.
b. The password is sent **in clear** (text).

このような **en Adj.** は意味的には制限的にヴァージョンを示しており、ある程度生産的である。二次叙述の構造とヴァージョンの意味は次のような事例にも見て取れる。

- (35) **Vous avez cette chemise { en blanc / en plus petit } ?**
このシャツの { 白いの / もっと小さいの } はありますか
- (36) **Le lynx, c'est un chat en plus gros. (= (7))**
リンクスは大型の猫である
- (37) **Voici la même en moins bon.**
ここに同じものでそれほどよくないのがあります
- (38) **Cette pièce ressemble à sa chambre en plus luxueux.**
この部屋は彼の部屋を贅沢にしたような造りだ

これらの **en Adj.** は、(35) (36) では色違い・サイズ違い、(37) (38) ではそれぞれ劣化版と豪華版を表しており、対象自体を形容しているのではない (cf. *Cette pièce ressemble à sa chambre luxueuse.* この部屋は彼の豪華な部屋と似ている)⁷⁾。また、次の (39) は英語と **en Adj.** が用いられたそのフランス語訳であるが、元の英語には “version” が明示されている。

- (39) a. **Harry had always imagined Bill to be an older version of Percy: [...].**
(Harry Potter and the Goblet of Fire, 52)
ハリーはビルのことをパーシーが歳をとった感じなのだろうとずっと思っていた
- b. **Aussi se l'était-il toujours imaginé comme Percy en plus âgé: [...].**
(Harry Potter et la Coupe de Feu, 51)

この種の **en Adj.** で比較級が用いられることが多いのは、ヴァージョンのアップグレードまたはダウングレードを示すことが多いからである。このようなヴァージョンを示す **en Adj.** を使用する際、発話者 (認知主体) は、心的に本人・原物・原型を経由して別ヴァージョンにアクセスしている。この認知プロセスをわかりやすく説明するために Langacker(1999) の参照点構造の考え方を援用すると、次のような構図を提示することができる。

⁷⁾ (35) に関しては、英語でも **in** が用いられる
(i) **Do you have this shirt { in white / in a smaller size } ?**
ただ、英語では、フランス語と同じように **in** に比較級の形容詞だけが続くことはない。
(ii) **Lynx is a cat { *in larger / , only larger }.**

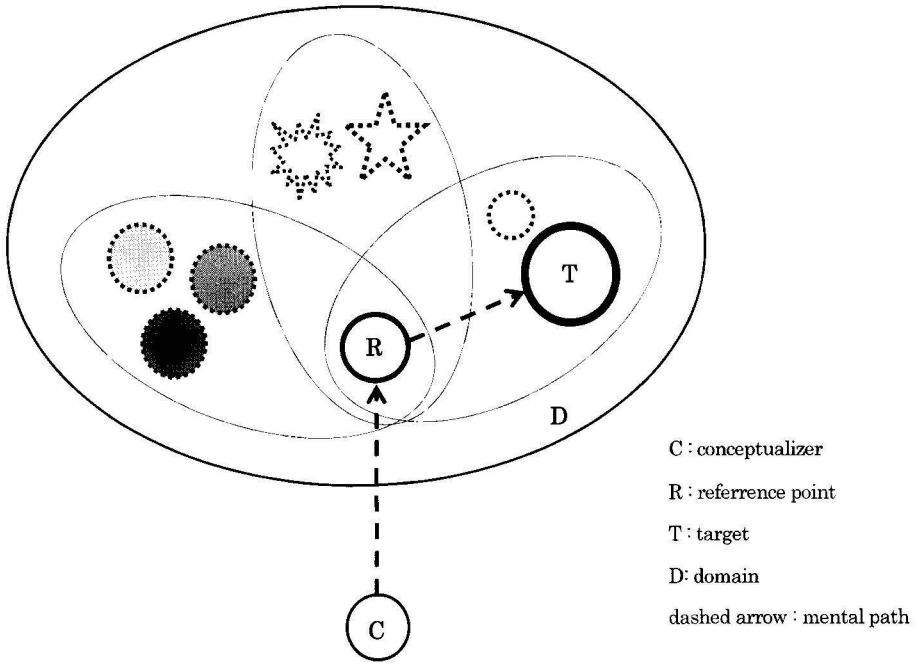


図1. ヴァージョンの集合をドメインとする参照点構造

様々なヴァージョンの集合であるドメイン内には、サイズや色の違うものや優劣の差があるものなどの部分集合がある。認知主体のメンタルコンタクト（心的接触）は、本人や原物や原型を参照点として、部分集合内の、形容詞によって制限された別ヴァージョンに至る。en Adj. で構成された二次叙述は、このような参照点構造の認知プロセスを反映する形式である。そして、この種の en Adj. にもまた変化の認識が関与している。ただしそれは、抽象的な主観的变化である。わかりやすい例を挙げよう。

(40) Lise ressemble à Rose en plus blond(e). (Melis 2007)

リースはローズをブロンドにした感じだ

この文の en plus blond(e) は、我々にローズを金髪（金髪女性）に変えさせる。ローズ自身は現実には変わらないが、我々の頭の中では変身しているのである。

4. まとめ

本稿では、二次叙述的用法とされる変化の含意の明白な en N およびヴァージョンを示す en N と en Adj. の関連性について、変化性に着目して考察を行った。様々な事例における認知主体の捉え方について検証し、結局、これらが二次叙述をなす場合、物理的・客観的であれ抽象的・主観的であれ、何らかの変化性が関与していることを明らかにした。とくに、これまで本格的に分析されていなかったヴァージョンを示す en Adj. については、本人や原物そのものを形容するのではなく、参照点構造でその別ヴァージョンを指定するというを示し、本人・原物からの主観的变化が関与していることを指摘した。en Adj. で構成される二次叙述は、主観的变化に基づく心的処理を反映する形式であり、日本語の‘形容詞+ノ’との対照研究も可能であろう。

本論考ではフランス語に限って考察したが、他のロマンス語の同根の前置詞にも同じような用法があるのかどうかは今後調査することにする。また、そのほかにもまだ解明すべき問題がある。それは、en が用いられる次のような結果構文についてである。

(41) **J'ai peint la porte en bleu.**

私は門を青く塗った

cf. **Comment peindre la porte de ce dessin ? Je la peindrais bleue.**

このデッサンの門をどのように塗るべきか 私ならそれを青く塗る

(Davau 1950 の改変)

(42) a. **Mary hammered the metal flat.**

b. **Marie a martelé le métal { *plat / *en plat }.**

(43) **Dans un bol, battre les blancs d'oeufs en neige avec le sucre.** (web)

ボウルの中で卵白を砂糖と共に泡立てること

(44) **Jean décore sa chambre en boudoir Louis XV.** (Leeman 1998)

ジャンは自分の部屋をルイ 15 世風サロンに装飾する

ゲルマン語と比べるとロマンス語の結果構文はかなり制約が強いことはよく知られている。しかしながら、例外的ではあるが、形容詞が用いられることもあるし、en N にしても何を基準にどの程度まで可能なかは不明である。このことについては、今後ロマンス諸語を対象としてデータ分析を行い、別稿で論じることにする。

【参考文献】

- Amiot, D. & De Mulder, W. (2001), “L’insoutenable légèreté de la préposition *en*”, *Studi di Linguistica* 1, 9-27.
- De Mulder, W. (2008), “*En* et *dans* : une question de « déplacement » ?”, in Olivier B., Prévost S., Charolles M., François, J. & Schnedecker C. (éds), *Discours, diachronie, stylistique du français : études en hommage à Bernard Combettes*, Peter Lang, Bern, 277-291.
- Desmets, M. (2008), “Constructions comparatives en *comme*”, *Langue française* 159, 33-49.
- Davau, Maurice (1950), “Adjectifs invariables (3)”, *Le français moderne* 18, 45-53.
- Flaux N. & Moline E. (2008), “Constructions en *comme* : homonymie ou polysémie ?”, *Langue française* 159, 33-49.
- Franckel, J.J. & Lebaud, D. (1991), “Diversité des valeurs et invariance du fonctionnement de *en*, préposition et préverbe”, *Langue française* 91, 56-79.
- Fuchs, C. (1999), “Les tours qualifiants en “comme N” : *Jean travaille comme maçon*”, in A. Deschamps et J. Guillemin-Flescher (eds), *Les opérations de détermination: Quantification/qualification*, Ophrys, 63-82.
- Fuchs, C. & Le Goffic, P. (2005), “La polysémie de *comme*”, in Soutet O. (éd), *La Polysémie*, Paris, PUPS, 267-291.
- 古川直世 (1984), 「ゼロ冠詞について」, 『フランス語学研究』 18, 70-78.
- Gougenheim, G. (1950), “Valeur fonctionnelle et valeur intrinsèque de la préposition « *en* » en français moderne”, *Journal de psychologie* 43, 180-192.
- Guimier C. (1978), “*En* et *dans* en français moderne”, *Revue des langues romanes* 83 (2), 277-306.
- 平塚 徹 (2008), 「フランス語の *prendre* タイプの動詞がとる場所補語について。非線状的事態認知モデル」 児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム。山梨正明教授還暦記念論文集』, ひつじ書房, 1-13.
- Homma, Y. (2010), “Étude sur l’emploi de *en* devant les noms de territoire en français”, *Cahiers de l’École doctorale* 139, Université de Paris Ouest Nanterre La Défense, 35-54.
- Homma, Y. (2011), “Principes de fonctionnement de la préposition *en* et absence d’article dans son régime”, *Langue française* 171, 77-88.
- Katz, E. (2002), “Systématique de la triade spatiale *à, en, dans*”, *Travaux de Linguistique* 44, 35-49.
- Kupferman, L. (1991), “Structure événementielle de l’alternance un / Ø devant les noms humains attributs”, *Langages* 102, 52-75.
- Lakoff, G. & M. Johnson (1980), *Metaphors We Live By*, University of Chicago, Chicago

- Press.
- Langacker, Ronald. W. (1999), *Grammar and Conceptualization*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Léard, J.-M. & Pierrard, M. (2003), "L'analyse de *comme* : le centre et la périphérie", *La syntaxe raisonnée*, in Hadermann P., Van Seijcke A. & Berré M. (éds), De Boeck-Duculot, 203-234.
- Leeman, D. (1995), "Pourquoi peut-on dire *Max est en colère* mais non **Max est en peur*? : Hypothèses sur la construction *être en N*", *Langue française* 105, 55-69.
- Leeman D. (1997), "Sur la préposition EN", *Faits de Langue* 9, 125-144.
- Leeman D. (1998), *Les Circonstants en question(s)*, Paris, Kimé.
- Leeman, D. (2013), "Pourquoi peut-on dire *être en faute*, *être dans l'erreur*, mais non **être dans la faute*, **être en erreur*?", *Langue française* 178, 81-92.
- Martini, B. & Vigier, D. (2013) : "Le régime nominal de la préposition *en* dans la construction *être en + N abstrait* : une étude aspectuelle", *Langue française* 178, 59-79.
- Matsumoto, Yo 1996a. *Subjective motion and English and Japanese verbs*. *Cognitive Linguistics* 7, 183-226.
- Melis Ludo, 2007, « La suite 'préposition adjectif' et la définition syntaxique de la préposition », dans P. Larrivée P (éd.), *Variation et stabilité du français. Des notions aux opérations*, Paris/Louvain, Peeters, p. 221-234.
- Morinière, M. (2008), "L'ellipse dans les constructions introduites par *comme* en diachronie du français", in Pitavy, J.-C. & M. Bigot (eds), *Ellipse et effacement : du schème phrastique au discours*, Publications de l'Université de Saint-Etienne, 67-76.
- 長沼圭一 (2003), 「役割記述機能を持つ無冠詞名詞句について—*quand on est femme, on ne dit pas ces choses-la*—」『フランス語フランス文学研究』83, 90-100.
- 長沼圭一 (2010), 「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」『愛知県立大学紀要言語・文学編』42, 113-135.
- Noailly, M. (2010), « L'adjectif, quand il est invariable, sort-il pour autant de sa catégorie? », in J. Goes & E. Moline (eds), *L'adjectif hors de sa catégorie*, Arras : Artois Presses Université, 189-202.
- 野呂健一 (2013), 「「赤いりんご」と「りんごの赤いの」—線条的類像性の観点から—」, *KLS* 33, 169-180.
- 小田涼 (2012) 『認知と指示—一定冠詞の意味論』, 京都大学学術出版会.
- Oguma, K. (2000), "Préposition "en" : contraintes et hypothèse-lecture critique des travaux de D.Leeman—" 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』40, 85-113.
- 小熊和郎 (2000) 「前置詞 *en* の制約と働き」『フランス語学研究』34, 50-55.

- Pierrard, M. (2002), “comme préposition ? Observations sur le statut catégoriel des prépositions et des conjonctions”, *Travaux de linguistique* 44, 69-78.
- 坂原 茂 (2012), 「フランス語コピュラ文の解釈と属詞の冠詞の有無」『フランス語学の最前線』1, ひつじ書房, 1-52.
- 敦賀陽一郎 (2010), 「現代フランス語の前置詞 en の統辞機能と用法 (定冠詞 le, les との共起性に注目して) 」, 東京外国語大学論集 80, 229-272.
- Takemoto, M. (1995) “L’attribut indirect: fonction et contraintes sémantiques”, *Études de Langue et Littérature Françaises* 66, 206-218.
- 武本雅嗣 (2016), 「フランス語の前置詞 en の周辺の用法について」『異文化研究』10, 山口大学人文学部異文化交流研究施設, 58-68.
- Tamba-Mecz, I. (1983), “La composante référentielle dans « Un manteau de laine » « Un manteau en laine » ”, *Langue française* 57, 119-128.
- Vigier, D. (2003), “Les syntagmes prépositionnels en en N détachés en tête de phrase référant à des activités”, *Linguisticae Investigationes* XXVI-1, 97-122.
- Vigier, D. (2004), “Contribution à une étude des constructions antéposées du type : « En homme intelligent et humain, il partagea tout de suite l’inquiétude de Marcel » (J. Verne) ”, *Discours* 2.
- Vigier, D. (2008), *Les groupes prépositionnels en « en N » : de la phrase au discours*, Thèse de l’Université Paris 3-Sorbonne nouvelle.
- Vigier, D. (2013a), “Comportements, déguisements, rôles de fiction...: De quelques emplois de la préposition en”, *Linguisticae Investigationes* 36, 1-19.
- Vigier, D. (2013b), “Sémantique de la préposition en : quelques repères”, *Langue française* 178, 3-19.
- Washio, R. (1997), “Resultatives, Compositionality and Language Variation”, *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.

【引用文献】

- Rowling, j. k. (2000), *Harry Potter and the Goblet of Fire*, Arthur A. Levine Books.
- Rowling, j. k. (2000), *Harry Potter et la Coupe de Feu*, traduit de l’anglais par Jean-François Ménard, Gallimard.